

- 一〇 \*ポアテム 本作品を含む《マニユエル伝》の舞台となるJ・B・キャベルが創造した国。ヨーロッパのどこかにあるという設定で、ドム・マニユエルが伯爵となって統治した。『土の人形』(本シリーズ近刊)参照。
- 一〇 \*フィリップ・ボーズデル/E・ノエル・コドマン/ジョン・フレデリック・ルイスタム この三人は実在の人物ではなく、キャベルの創作である。フィリップ・ボーズデルは「コリンナについて」の主要登場人物の一人でもある。それぞれポアテムに関する著作があることになっていて、ボーズデルは *Pathologica Daemonica*、コドマンは *Handbook of Literary Pioneers*、ルイスタムは *Key to the Popular Tales of Poitresme* となっている。
- 一三 \*リーザ夫人 《マニユエル伝》に属する『夢想の秘密』(国書刊行会)における「ライザ夫人」と同一人物。同書所収の家系図に「ライザ夫人はイエアのニンシアンとして知られる魔神サークラグの女と専ら考えられている」と記されている。ただし、『夢想の秘密』の訳者あとがき、杉山洋子「J・B・キャベルの世界劇場」ではリーザ夫人となっている。
- 一三 \*オリゲネス 「一八五〇二五四?」アレクサンドリア生まれの神学者。ギリシャ哲学とキリスト教を統合した聖書理解を試みた。その救済論では悪魔でさえ救われる可能性があるとして激しい論争を起し、死後三百年経って異端宣告を受けた。
- 一六 \*モルヴェン マクファーソンが、古代の盲目の詩人オシアンによるゲール語詩の英訳として発表した作品に登場する、フィンガルが治める伝説の王国名。Mor-earann、すなわち大きな部分・区画という語が由来といわれる。

- 一七 \*ドロシー ドロシー・ラ・デジレーはドム・マニユエルの三番目の子。
- 一七 \*ワルブルギスの夜 聖ワルブルギス(ヴァルブルギス)の祝日前夜。四月三十日の夜。ドイツでは魔女がブロッケン山上で魔王と宴を張るといふ。
- 二〇 \*ヘラス ギリシャの古名。
- 二一 \*コシチエイ ロシアの民話に出てくる瘦せた不死身の老人 *Koshchi* から。名前のみの借用で特別深い関係はないようである。
- 二二 \*ネツソス ギリシャ神話に出てくる、ケンタウロス族の一人で、自分の死後長らく経ってからヘラクレスに死をもたらした。ヘラクレスの妻デイアネイラを犯そうとしてヘラクレスの毒矢で射られたが、ヘラクレスの衣に自分の血を塗り、これが後にヘラクレスの愛を取り戻すといってデイアネイラを騙した。
- 二七 \*ダナエ ギリシャ神話に出てくるアルゴスの王アクリシオスとエウリュディケの娘。ダナエを見初めたゼウスが黄金の雨となって彼女の上に降り注ぎ、その結果ダナエが産んだのがゼウスの息子ペルセウスである。
- 二八 \*ストーリセンド キャベルの創造したポアテムにある都市。『夢想の秘密』で初めて登場し、それ以降たびたび言及される。Story's End から作られたと推定されている。
- 二八 \*エメリック伯爵 ドム・マニユエルの一人息子。ポアテム伯となる。『夢想の秘密』第一部に登場する。
- 二八 \*ルドルフ／アン この二人は、『マニユエル伝』に属する『The River in Grandfather's Neck (1915)』の登場人物 Rudolf Musgrave と Anne Willoughby である。
- 二九 \*マスタード壘 この二人は『マニユエル伝』に属する『The Courts of Vanity (1909)』に登場する Stella Musgrave と Robert Townsend と Stella と Lizzie Musgrave の会話に赤と青のマスタード壘の話が出てくる。
- 三四 \*ハイトマン・ミカエル ドム・マニユエルに仕えた男爵であるペルディゴンのギーヴリック(『マニユエル伝』に属する『The Silver Stallion [1926]』に登場する)の息子。
- 三六 \*ポアテムの救世主 ドム・マニユエルのこと。『土の人形』の終盤に少年ジャーゲンがこの世から立ち去る。

るドム・マニユエルを目撃する場面がある。

- 三八 \*ソワクルの司教代理 ソワクルは《マニユエル伝》に出てくるガティネ公の家系。『夢想の秘密』ではレイ・ソワクルが断頭台で処刑される。司教代理は武力を持たない教会領主に代わって司教管区の防衛に当たり、裁判も行った。

- 三八 \*ガティネ フランスのバリ盆地ロワン川沿いの地方。

- 三八 \*メトセラ 旧約聖書の中で最も長生きした人物。九百六十九歳まで生きた。「創世記」第四章第十八節他。

- 四八 \*犬頭人 エジプトで崇められた犬頭を持つ人間。

- 四八 \*ワルキューレ ヴァルキューリヤとも。北欧神話でオーディン神に仕え、空中に馬を走らせて戦場で生きる者と死ぬ者を定める女性。英雄たちの霊をヴァルハラに導き、そこに待する。

- 四八 \*ヤガー婆さん ロシア民話に出てくる妖婆 Baba-yaga。子供を攫って焼いて喰う。

- 四八 \*モルフエイ ロシア民話。どんな要求にも応じてあらゆる料理を魔法の力で出すバーバヤガーの料理人。

- 四八 \*オー ロシア民話。その名を口にされるとどこへでも姿を現わす魔法使い。

- 四八 \*レブラコーン アイルランド民話。レブラホーンとも。アイルランド語 Leith bhrogan、すなわち片足靴屋の意味から。

- 四八 \*空腹人 <sup>フアールホルダ</sup>アイルランド民話で、飢饉のときに物を乞いしながら歩き回り、恵んでくれた人に幸運をもたらす妖精。

- 四八 \*クロブヘア アイルランド民話の妖精の名。

- 四八 \*ケイロン ケンタウロス族の一人。他のケンタウロスと違いクロノスとピリュラの子。

- 四八 \*スフィンクス ギリシャ神話。女の頭とライオンの体で、翼を持つ怪物。

- 四八 \*キマイラ キメラとも。ギリシャ神話。首から上はライオン、胴は山羊、尾は蛇という怪物。口から火を吐く。

- 四八 \*ケルベロス ギリシャ神話。地獄の番犬で、通常は三つの頭を持つ姿で描かれる。蛇の尾を持ち背中には

蛇の頭が多数生えている。

四九 \*テッサリア ギリシャ中東部の一地方。

四九 \*アレクシオス アクレシオス二世。ビザンティン帝国皇帝「一一八〇—一一八三」マヌエル二世の後を継いだとき十二歳だった。その母マリアが摂政となったが、アンドロニコス一世がマリアを殺害し共同皇帝となる。一一八三年、アレクシオスは弓の弦で首を絞められて殺された。

四九 \*ヴァリヤーギ親衛隊 十一—十二世紀のロシア人・北欧人からなるビザンティン帝国皇帝の親衛隊。

四九 \*パライオロゴス ビザンティン帝国最後の王朝「一二五九—一四五三」。初期の版では、この名前はアンドロニコス「在位一一八一—一一八五」だったが、そのときジャーゲンはまだ生まれていないので、パライオロゴスと変えられた。ミカエル八世パライオロゴス「在位一二六一—一二八二」だと思われる。

五〇 \*アウドウムラ アウズフムラとも。北欧神話に登場する、氷塊を覆う霧から滴り落ちる滴から生まれ、巨人イミルに乳を与えた牝牛。この牝牛が氷の塩を舐めると最初の神ブリーが現れた。

五四 \*セリーダ ロシア語の水曜日(真ん中)という意味の *sereda* から。《マニユエル伝》に属する「月蔭から聞こえる音楽」(『幻想と怪奇』第二号「一九七二年七月号」所収)に「豊饒な胸のマーヤ」として登場する。『イヴのことを少し』(本シリーズ近刊)にも登場し、重要な役割を演じる。

五六 \*マーヤ ヒンドゥー教では幻想の世界を動かす原動力を象徴する女神の名前であり、仏教ではブツダの母の名である。

五六 \*レシー ロシア民話。*лешее* 森の妖精から。ロシア民話では若い娘をかどわかすサテュロス(本書四六五頁サテュロスの項を参照)のような生き物だが、キャベルはポアテムにいる女神たちのような存在として描いた。この後の本文に出てくる、曜日を支配しているレシーたちの名前は何れもロシア語が由来で、チエトヴェルクは木曜日 *четверг*、ウトルニクは火曜日 *вторник*、スポータは土曜日 *суббота*、ピヤティンカは金曜日 *пятница* からとったと思われる。ネデルカの由来は *неделя* で、これは現在は「週」という意味で用いられる語だが、昔は日曜日だった。

- 五六 \*ククロト ギリシャ神話。三人の運命の女神の一人で「紡ぐ女」を意味し、その糸車から生命の糸を紡ぎ出す。
- 五六 \*ラケシス ギリシャ神話。三人の運命の女神の一人で「運命の図柄を描く者」。
- 五七 \*パンデリス ロシア語の月曜日 *понедельник* から。
- 六一 \*サペリウス 三世紀のローマのキリスト教神学者で、様態的一位説を主唱した。本書四五頁サペリウス主義の項を参照。
- 六一 \*小アールテミドラス シェイクスピアの史劇『ジュリアス・シーザー』に登場する修辞学の教師。
- 六一 \*ニカノル セヴィウス・ニカノル。ローマの歴史家・伝記作者スエトニウスが、最初の文法学者として名前を挙げているとされる。
- 六四 \*コス ジャーゲンの父コスは、ドム・マニユエルの銀馬騎士団の一員だった。
- 六六 \*ド・モントール アイラール・ド・モントール。ドム・マニユエルの異父姉マチエットの息子。
- 六六 \*ニアフェル ドム・マニユエルの妃。『土の人形』ひながた参照。
- 六六 \*ピュイサンジュ子爵 子爵がフェリーズと結婚して生まれたフロリアン（実はジャーゲンの子）とペリオンの孫シルヴィ・ド・ノアンテルが結婚することになる。
- 六六 \*ペリオン・ド・ラ・フォレ メリサンの夫となるのだが、それまでの波瀾に満ちた経緯が『マニユエル伝』に属する *Domnei* で語られる。本書第二十九章も参照のこと。
- 六六 \*メリサン ドム・マニユエルの長子。魔術師スルアゴルの息子デメトリオスと結婚する。後に、ペリオンと再婚。
- 六六 \*フェリーズ・ド・ソワクール 後のフェリーズ・ド・ピュイサンジュ。ジャーゲンとの子供については本書第八章を参照のこと。
- 六七 \*エツタール ドム・マニユエルの末娘。『夢想の秘密』や「月蔭から聞こえる音楽」に登場する。
- 六七 \*ギロン・デ・ロック 『夢想の秘密』で少なくともある期間にはエツタールの愛を勝ち取る。

- 六七 \*モーギ・デグルモン フランスの騎士物語やロマンスの登場人物。『夢の秘密』に登場し、エッタルを巡ってギロン・デ・ロックと争う。
- 六八 \*硬貨削り ファイリッピン 金貨や銀貨からごく少量を削り取り貴金属を集めた。
- 七一 \*ノクス ローマ神話。ギリシャ神話のニユクスに当たる。夜の女神。
- 七一 \*エレボス ギリシャ・ローマ神話。暗黒の神で、カオスの息子。姉妹ニユクスとの間に息子アイテル（大気の神）、娘ヘメラ（昼の女神）、冥府の川の渡し守である息子カロンが生まれた。
- 八〇 \*ア・アブ・フル・フス トマス・ミドルトン『魔女』に出てくる魔女の言葉。
- 八一 \*スクラウグ *The Silver Stallion* で、黄色の紳士の姿をした吸血鬼。すべての書物を取る図書館の番人。
- 八二 \*燭台を持ったキット *Kit with the candlestick* (本書では *Kit*) レジナルド・スコット *Discovery of Witchcraft* (1784) に出てくるお化け。
- 八二 \*エマン・ヘタン プレネザトランティック地方の魔女の呪文。
- 八二 \*トム・タンブラー レジナルド・スコット *Discovery of Witchcraft* に出てくる子供を怯えさせるお化けの一つ。
- 八二 \*スタドリン トマス・ミドルトン『魔女』に登場する魔女。
- 八二 \*ティブ トマス・ポット *Discovery of Witches* (1613) に記録されているマザー・デムダイク（エリザベス・サザン）の告白に *Tib* とごう名の霊が出てくる。本書では *Tib*。
- 八三 \*フェリーズ・ド・ピュイサンジュ 本書四四九頁フェリーズ・ド・ソワクルの項を参照。
- 八八 \*グイネヴィア アーサー王伝説では、アーサーの妃であり、ランスロットの恋人であり、ロデグランス王の娘である。ウェールズ語ではグウェンフィヴァールすなわち白い幽霊という意味で、その名には妖術、欺瞞、悪しき力という概念が結びついており、非運を持ち込む存在とされる。
- 九三 \*ゴギアヴァン ゴギアヴァン・ゴウア。古いウェールズの伝説では、アーサー王には三人の妃がいて、名前は何れも *Gwenhwyvar* だった。一人目は *Gwenhwyf ap Greidol* の娘、二人目は *Gwryd Gwent* の娘、三番目

は Gogryvan Gaur の娘である。Gaur は巨人という意味である。

九三 \*ログレウス 古代のロマンスではアーサー王の王国を Logres すなわちログレス（ローグル）という特別な名称で呼んだ。

九三 \*トロール 北欧伝説。洞穴などの隠れ処に住む巨人。

九三 \*カリバーン アーサー王伝説で有名な魔剣。エクスカリバーという名前でも知られる。アーサー王伝説でアーサーは（湖の貴婦人）から剣を受け取る。

九四 \*ミラモン・スルアゴル 『土の人形』にも登場する強い魔法を持つ魔法使い。The Silver Stallion では、銀馬騎士団の一員でゴントロンの総督にもなる。シャーロット・ゲストは『マビノギオン』の註釈で、「ロブナイの夢」に出てくる騎士カラダウクの馬の名前がスルアゴルと記録されていると記している。ミラモンの息子はメリサンと結婚した。なお、『夢想の秘密』ではルアゴルという表記だったが、ウェールズ語風の綴りなので、本書ではスルアゴルを採用した。

九六 \*ギホン エデンの園を流れる川、あるいはエルサレム近くの泉の名。

九八 \*クリム・タタール クリミアの古い呼び名。

一〇二 \*キャメラード アーサー王伝説でグィネヴィアの父ロデグランス王が治める国の名前。

一〇三 \*アーサー 六世紀に活躍したとされるブリトン人の神話上の王。ユーサー・ペンドラゴンの息子。サクソン人の地からブリテン島へ来襲したゲルマン系の種族を撃退したとされるケルトの英雄。

一〇五 \*ソルナティウス 大ブリニウス「二三〜七九」の著作で引用されているが、本人の著作は現存していない。  
\*マールン・アンブロシウス メルランあるいはメリリヌスとも。ウェールズ人の神話上の予言者。一一三

五年頃にアーサー王伝説に統合された。予言の他に変身能力もあった。ユーサー・ペンドラゴンをコーンウォール公爵夫人の夫の姿に変えることでアーサー王誕生のお膳立てをした。マールンとニミュエの話が『イヴのことを少し』三十一章にも出てくる。

一〇七 \*預言者ナタン 預言者ナタンはダビデ王に助言者として信頼されていた。旧約聖書「サムエル記 下」第

十二章で、ダビデ王がバト・シェバを娶るために夫のヒッタイト人ウリヤを戦場で死なせ、その罪を隠そうとしたとき、ナタンは喩え話をしてその卑劣な行いを諫めた。

一〇八 \*ヨランダの破滅 この章はアーサー王伝説の一挿話に基づいている。例えばトマス・マロリー『アーサー王物語Ⅰ』（筑摩書房）ならば第四卷第二十二章「ガウウェイン卿とエタード」である。

一〇八 \*ノースガリス 北ウェールズのこと。

一〇八 \*ライエンス マロリー『アーサー王の死』（『アーサー王物語』〔筑摩書房〕他）に、アーサー王に敵対する北ウェールズのライエンス（リエンスとも）王が出てくる。アーサー王の騎士ベイリンとその弟ベイランに捕えられる。

一〇九 \*グレマゴグ イングランドにいたという伝説の巨人の名前がゴグマゴク（あるいはゴエマゴット等）だった。スペンサー『妖精の女王』にはゴエマゴットおよびゴエマットの名で登場する。

一一〇 \*蠟燭の光を灯して見るほどの価値もありません 骨折り損のくたびれもうけの謂。

一一六 \*カロエーズ アーサー王伝説でキャメラードの都の名前。

一一一 \*エヴラウク王子 『マビノギオン』の「エヴラウクの息子ペルドゥルの物語」に出てくる伯爵の名前。

一一二 \*それを救ったのは鷲鳥 紀元前三九二年、ガリア人がローマを包囲したとき、鷲鳥の群れの鳴き声でカピトリウムの丘へ逃げ込むガリア人に気づいてマルクス・マンリウスがガリア人を撃退したという言い伝えがある。

一一三 \*オベリオン 紀元前三六〇年頃、アテネにいた喜劇詩人。

一一三 \*ファビアヌス・パピリウス ティベリウス・カリグラ帝時代のローマの修辭学者、哲学者。

一一三 \*セクスティウス・ニゲル 共和制末期からアウグストゥス帝時代にローマにいた哲学者。ストア学派・ピタゴラス学派の規範の向上に貢献した。

一一三 \*アナイティス夫人 アナイティス *Anaitis* すなわちアナーヒター *Anahita* はイスラム以前のペルシャで崇拜された女神の名。ササン王朝時代は王室がアナーヒター女神に仕えるイスタフルの拝火神官だったので



特別な崇拜の対象となった。原義は「束縛されていない」とされるが、中世ゾロアスター教の神話では金星を指すと解釈された。キャベルは同時に「湖の貴婦人」の呼称を与えているが、これはアーサー王伝説に登場する水の妖精である。アーサー王にエクスカリバー（カリバーン）を手渡す役目も担った。

一四〇 \*サー・ドディナス・ル・ソヴァージュ 『アーサー王の死』に登場する騎士の名。

一四〇 \*サー・エビノグリス 『アーサー王の死』にエビノグラス卿という騎士が出てくる。ノーサンバーランド王の息子。

一四〇 \*サー・エクター・ド・マリス 『アーサー王の死』に登場する騎士の名。

一四〇 \*ダマス伯爵 『アーサー王の死』に登場するサー・ダマスは「逆心にあふれる並ぶ者としてない臆病者で、誰よりも不実な騎士」と記され、モルガン・ル・フェイとともにアーサー王を陥れて殺そうとした。

一四二 \*スモイト王 『マビノギオン』にスモイトの息子セリフという名前がある。

一四二 \*ウリエン 初期の版ではオルウェンだった。『マビノギオン』の「ウリエンの息子オウアインの物語、あるいは泉の貴婦人」からか。

一四二 \*ペンウェイド・ギア ウェールズ神話でペンウェイドは「地の果て」という意味である。

一四八 \*ウルスラ ヤコブス・デ・ウオラギネ 『黄金伝説』によれば、ブリタニアの女王ウルスラがイングランド王子との結婚の前に千百万の乙女と共にローマを訪れた後、ケルンでの反キリスト教勢力の企みで、フン族に全員虐殺されたという。

一四八 \*ロクライン スペンサー 『妖精の女王』第二巻第十篇に、ブリテンの長ロクラインの名前がある。押し寄せるフン族に対して砦を築いて国を守った。

一四八 \*コリネウス公爵 コラインアスとも。『妖精の女王』第二巻第十篇に、ブルート麾下の將軍コリネウスが巨人ゴエモットを倒し、その支配地イングランド南西部を与えられ、その地をコーンウォールと名付けたと記されている。

一四九 \*ティルノグ Tynog と綴るがこれはおそらくティル・ナ・ノグ Tir Na nOg すなわちアイルランド神話の

〈常若の国〉に由来する。

一四九 \*ディオクレティアヌス ローマ皇帝「二八四〜三一六」。キリスト教大迫害を行った。

一四九 \*聖ウイトゥス 四世紀初頭のキリスト教少年殉教者。

一五〇 \*ペンピンゴン・フライチフラス・アプ・ミルワルド・グラサニーフ 『マビノギオン』の「エルピンの息子ゲライントの物語」にアルスル（アーサー）の七人の家臣の一人として「ペンピンギオン」の名前が見られる。

一六二 \*小さな鏡／白い鳩 《マニユエル伝》では、小さな鏡と白い鳩が魔術的な意味合いをもって繰り返し登場する。ここでジャーゲンが思い出している場面や、『夢想の秘密』第二部第七章、第三部第三章でも見られる。

一六三 \*誰の子供か マーリンは夢魔（インキュバス）と交わった母から生まれたといわれている。高僧に匿われた母親から生まれるとすぐに洗礼を与えられ悪魔の仲間へ堕ちることを免れ、人間を超えた能力を持つことになったという。

一六五 \*アデレス Aderes は Sereda の逆綴。

一六五 \*ユーサー・ペンドラゴン アーサー王の父。アーサー王伝説では、グイネヴィアとの婚礼の祝いとして円卓をアーサーに与えたのはロデグランス王だが元の所有者はユーサー・ペンドラゴンだといわれている。

一六七 \*アポロニオス・ミュロニデス 紀元前一世紀の医師。しばしばアポロニオス・ヘロフィリスと同一人物だといわれる。

一六七 \*ミュロシス プリニウスによってアポロニオス作とされた本。

一六七 \*アポロニオス・ヘロフィロス 紀元前一世紀前後の医師。薬学に関する著作がある。

一六七 \*長阿含経 仏教経典の中では最も古いものの漢訳『阿含経』の一つ。中でも比較的長いものが含まれているので、『長阿含経』と呼ばれる。

一七〇 \*褐色の男 古代ギリシャの森林、牧羊の神パンに似ている。パンは上半身は人間、脚は山羊で葦笛を吹く。

- アーサー・マッケン「パンの大神」との関係指摘されることもある。『イヴのことを少し』の三十四章に登場する茶色男と同一。《マニユエル伝》に属する *The High Place* にも。
- 一七一 \*ウエノフレ エジプト宗教のオシリスの別名。冥界の王で、死者を裁く神。
- 一七六 \*ピラト イエスの時代にローマ帝国からパレスチナに派遣されていた行政長官。最初イエスを釈放しようと試みるが、結局十字架刑を宣告した。
- 一七六 \*メルキゼデク 旧約聖書において王であり司祭であると書かれたメルキゼデクについて「詩篇」第百十一章四節で「あなたは、メルキゼデクに連なるとこしえの祭司」という約束の成就がイエスであることが新約聖書「ヘブライ人への手紙」で示唆されている。
- 一七六 \*セム ノアの三人の息子の一人。
- 一七六 \*ロゴス キリスト教では神のことばであり、三位一体の第二位であるイエスを意味する。
- 一七六 \*アarius派 父なる神と子なる神（イエス）は異なる存在として三位一体を否定したともいわれた。
- 一七六 \*サベリウス主義 父と子と聖霊は唯一の神の異なる顕現形態であるといい、三位一体を否定するものとして異端とされた。本書四四九頁サベリウスの項を参照。
- 一七七 \*ザグレウス 通常ディオニュソスと同一視され、オルペウス秘教を実践した一派の信仰において重要な役割を果たしたクレタ島の神。
- 一七七 \*ヴァレンティノス エジプト出身で二世紀半ばに活動したキリスト教思想家。その説では、下位の神的存在であるソフィアすなわち智慧が至高神を直接に知ろうとして失敗し、超越的な光の世界プレーローマから転落するというできごとが決定的な役割を演じる。
- 一七七 \*ソフィア グノーシス主義においては、智慧ソフィアはプレーローマの最下位に位置する女性神である。
- 一七七 \*アカモート ヴァレンティノスが「不完全な智慧」に対して与えた名。
- 一七七 \*パンテラ イエスの実の父親であるといわれることがあるローマの兵士の名。二世紀ケルソスの説。三世紀のオリゲネスの反論文が残っている。

- 一七七 \*バシレイデス 二世紀アレクサンドリアの哲学者。
- 一七七 \*カラカウ バシレイデス派によれば、全能の救い主は「カラカウ」と呼ばれるとされ、イエスはカラカウだったかも知れないとキャベルが仄めかしている。
- 一七七 \*ケリントス派 ケリントスは紀元一世紀頃の小アジアのユダヤ人グノーシス主義者。キリスト養子論を唱えた。本文では *Merinthians* と綴っており、ギリシャ語由来の「輪縄」とかけた軽蔑の気持ちを込められていると思われる。
- 一七九 \*ランスロット アーサー王伝説に登場する騎士の一人。ランスロットが王妃グイネヴィアに対して抱いた道ならぬ恋は、アーサー王騎士団の崩壊と王国没落の原因となった。
- 一七九 \*コカイン国 *Cockaigne* と綴れば（本作品では *Cocaigne* である）中世ヨーロッパの物語に登場する逸楽の国である。美食や怠惰な暮らしに明け暮れる楽園として描かれ、中世ヨーロッパのユートピア像の一つである。
- 一八二 \*アニスターとカルムーラ 『イヴのことを少し』でジェラルド・マスグレイヴが異世界へ行っているあいだにサイランがジェラルド・マスグレイヴの名前で書いた本に『アニスターとカルムーラの神話』というものがある。
- 一八四 \*ミノス王 ギリシャ神話。クレタ島の王。ゼウスとエウロペの子。ポセイドンから授けられた牡牛が美しかったので生贄として捧げる約束を破り別の牡牛を捧げてポセイドンの怒りを買う。
- 一八四 \*プロクリス ギリシャ神話。アテナイ王エレクテウスの娘。ケパロスと結婚。ミノスの病気を治した後には彼女自身が愛人になったが、パシバエが嫉妬したのでアテナイのケパロスのもとへ帰ったという話がある。
- 一八四 \*パシバエ ミノス王の妻。ポセイドンの怒りのために、贈られた牡牛と交わりミノタウロスを産む。
- 一八七 \*ケベラ エジプト神話。昇る朝日の太陽神の名前。黄金虫（スカラベ）を頭に戴いた姿で表される。The *Silver Stallion* に *Khypera* という名前前で登場する。
- 一八八 \*ジクチャー チベット仏教でドルジェ・ジクチャー（*rdzo rje jig-byed*）は畏怖すべき金剛の謂でヤマーン

- タカ(大威徳明王)の二形態。九面三十四臂十六足像として描かれることが多い。妃であるドルジェ・ロランマ(ヴァジュラフエーターリー)を抱く像もある。
- 一八八 \*タンガロ・ロクオン マレーシア神話。患者の神。何も知らず、患者のように振舞う。
- 一八八 \*レグバ 西アフリカのダホメ王国(現ベナン)の神話。世界を創造したナナブルクから生まれた双子マウとリサの末子。マウが月、リサが太陽で、月蝕や日蝕に天のまぐわいがなされているとされる。レグバは地上の特定の領域を与えられず、神々と人間たちのあいだのメッセンジャーの役を果たすトリックスターの性質を持つ。
- 一八九 \*ヴェールを破る儀式 この章の儀式はアレイスター・クロウリー『第十五の書 グノーシスのミサ』の第IV章「(ヴェール)を開ける儀式について」記載の儀式に基づく。『魔術 理論と実践』(国書刊行会)の附録VI「O・T・O」の項に収録されている。
- 一八九 \*聖コスモ／聖ダミアヌス 三〜四世紀に生きた兄弟。ディオクレティアヌス帝「在位二八四〜三〇五」の「最後のキリスト教大迫害」〔三〇三〕で、激しい拷問の末に殺された。
- 一八九 \*聖ギニョル フランスのブルターニュ地方にあるランデウエネック修道院の設立者。
- 一九二 \*アレクトとティシポネ 第二十四章を参照。
- 一九二 \*エウメニデス ギリシャ神話。「善意の人々」の謂。単数形はエウメニス。通常エリニエスたちを婉曲に指す名として使われる。正義と復讐の女神たち。
- 一九三 \*汝に善となることを「…」アレイスター・クロウリーの言葉「汝の意志するところを行え。これこそ法のすべてとならん」に対応している。その言葉はフランソワ・ラブレール『ガルガンチュウ』にまで遡る。
- 一九六 \*バプテスマのヨハネ生誕日 洗礼者ヨハネの誕生日とされる六月二十四日。イエスの半年前に生まれたとされるので、クリスマス夏の半年前となっている。生誕日前夜には魔女や精霊が現れるといわれる。
- 二〇〇 \*シャクティ・サダナ シャクティはヒンドゥー教で女性原理、生殖能力、性力（しんりき）を意味し、サダナは苦行・修行という意味である。

- 二〇四 \*プリア波斯 ギリシャ神話。庭園の神。アプロディテとディオニュソスあるいはヘルメスとのあいだに生まれ、あまりにも醜く母親に捨てられた。グロテスクで小さく瘤だらけの身体に巨大な男根がついていた。
- 二〇四 \*バツカス デイオニュソスの別名。
- 二〇四 \*テュルソス 葡萄の蔓あるいは蔦の茎を巻いた杖に松毬まつぼっくりをのせたもの。
- 二〇五 \*アピス アルゴスの建国者ポロネウスとニンフのテレディケとの息子。アイトロスにアザンの葬礼競技で戦車戦車に轢き殺される。
- 二〇五 \*メンデスのバー メンデスは古代エジプトの都市。Djedetのギリシャ名。メンデスの神はBanejdjedetといい、メンデスの王バー（靈魂）という意味だった。山羊あるいは羊の頭を持つ姿で描かれた。
- 二〇五 \*サーカ族 紀元前二世紀イラン東部やインドに移住した、おそらくスキタイ人と思われる古代人。
- 二〇五 \*オルタネスとか「…」とかだ バアル・ペオルはペオルのバアルの謂。バアルはシリア、パレスチナ、エジプトで豊饒の神として崇められていた。旧約聖書では厳しくこれを抑圧している。Ancien Symbol Wor-ship (1875)によれば、シリアで男根を口に銜えた姿で表されたという。同様の男根崇拜が、チュートン人・スカンジナビア人のフリッコ、スペイン人のオルタネス、アッシリアのヴルで見られるとしている。
- 二〇六 \*アシェラ フェニキア人・カナーン人に崇拜された女神アシェラを象徴する神聖な棒の呼び名。
- 二〇六 \*コム 櫛、宝貝を意味するギリシャ語κρομμύςは女陰を象徴していた。
- 二〇六 \*ファルス デイオニュソスやバツカスの祭りで使われた自然界の生成力を象徴する男根像。
- 二〇六 \*リンガム ヒンドゥー教のシバ神の表象として礼拝する男根像。
- 二〇六 \*ヨーニ ヒンドゥー教で女神シャクティの表象として崇拜する女陰像。
- 二〇六 \*アルガ 船体がヨーニ、マストがリンガムの船の像。
- 二〇六 \*プレイアール シヴァ神信者の一部に崇められた男性器・女性器両方を併せ持つ像。
- 二〇六 \*タリー インドではタリーと呼ぶ宝石をお守りとして首から掛けた。結婚の印でリンガムやプレイアールの形を彫った。

二〇六 \*セクメト エジプト神話。創造神プタハの配偶神でライオンの頭をもつ。太陽熱の破壊力を表し、冥界の悪人の魂を懲らしめる。

二〇六 \*イオ ギリシャ神話。ゼウスに愛されたためにその妻ヘラの嫉みを買った巫女。ゼウスにより白い若牝牛に変えられたがそれを怪しんだヘラに追及され世界中を放浪し最後にエジプトに逃れて人間に戻った。エジプト人はイシスと同一視する。

二〇六 \*ヘクト 蛙の頭を持つエジプトの女神。繁栄の象徴。「出エジプト記」第八章等。

二〇六 \*デルセト シリアの魚の女神。

二〇六 \*タウレト エジプト神話。セトの妻である女神。妊婦の守り神で出産を司る。河馬の頭と胴体、ライオンの足、鱔の尾を持つ。

二〇六 \*エフェソス 小アジア西部イオニアの古都。エペソとも。アルテミス崇拜で知られたギリシヤ人の都だった。

二〇七 \*タンムーズ シュメール神話・アッカド神話の神。農耕・牧畜の神で、冬は地下の冥府で過ごし、春に地上に戻って妻イシュタルと過ごす。

二〇七 \*アルメニア アジア西部の古代国家。

二一四 \*柱頭行者 高い柱の上に住み、孤独な修行を続ける苦行者。

二一四 \*テーベ地方 古代エジプトの Thebes 周辺地域。

二一四 \*アステュアナツサ ムーサイオスと、ヘレネーの召使いは隷の娘といわれている。淫らな詩を書いたとされる。

二一四 \*エレファンティス 一世紀後半のギリシヤの詩人。エロティックな詩を書いた。体位論 *Varia concubitus genera* を書いたとも伝えられる。

二一四 \*ソタダス 紀元前三世紀のギリシヤの詩人。トラキア出身。プトレマイオス二世ピラデルポスが実の姉と結婚したことを揶揄する詩を書いて捕えられ、一度は逃げたものの処刑される。回文詩を発明したともい

われる。Cinetica (男色の相手の少年の謂) という詩を書いた。

二二四 \*スピントリエ論文集 ローマ帝国第二代皇帝ティベリウス・ユリウス・カエサルはカプリ島に引き籠もつて、庭園に集めた男女に性的倒錯行為を仕込み、彼らをスピントリエと呼んだ。スピントリエは元來腕輪の意味である (spinner) が、数珠繋ぎの形からそう呼ばれた。後に、男娼を spūta と呼ぶようになる。

二二四 \*キレネ 北アフリカの古代ギリシャの植民都市。クレナイカの首都。

二二四 \*アサン リチャード・バートンが『千夜一夜物語』の巻末論文で、アサンを性交体位を示す絵として用いている。

二二四 \*イースリド Ercid は Sarcra のアナグラムとなっている。

二二六 \*アケローン ギリシャ北西部を流れる川の名前であり、冥界を流れる川でもあり、その川の神の名前でもある。

二二六 \*復讐の女神 単数形はエリニユス。正義と復讐の女神たち。アレクト、メガイラ、ティシポネの三人姉妹。

二二七 \*エクバタナ 古代メディアの首都。

二二七 \*レスボス島 エーゲ海北東部に位置する島。

二二〇 \*エリコ エリコの戦いを指す。旧約聖書「ヨシユア記」に書かれた預言者ヨシユアがイスラエルの民を率いて城砦都市エリコを包囲し神の言葉に従い角笛を吹き鳴らすとその城壁が崩れ、エリコは滅ぼされた。

二二三 \*ハドリアヌス五世 ローマ教皇「一二七六」。教皇に選出されて五週間後に死去した。

二二三 \*ヨハネス二十一世 ローマ教皇「一二七六—一二七七」。

二二七 \*アトランティス プラトンが最初に言及した、ジブラルタル海峡西方の大西洋上にあつて、地震と洪水で一日にして海底に沈んだ伝説の島。

二二七 \*ブリアレオース ギリシャ神話。ヘカトンケイレス、すなわちウラヌスとガイアの三人の息子の一人。それぞれが五十の頭と百の手を持つ。

二二八 \*イニシュロハ アイルランド神話。湖の島の意味で世界の四つの楽園の一つ。南にイニシュ・ダレブ、北



にイニシユ・エルカンドラ、東にアダムの楽園がある。

二二二八 \*アンガス・オーグ アイランンド神話。愛と美の神。

二二二八 \*ヴァイクンタ ヒンドゥー教の神ヴィシヌが支配する、七重の城壁を備えた光り輝く世界。

二二二八 \*オギユギア ギリシャ神話。女神カリユプソが住んでいた島。流れ着いたオデュッセウスが七年引き留められていた島でもある。

二二二八 \*スダルサーナ インドの叙事詩神話『マハーバーラタ』に出てくる国の名前。

二二二八 \*幸運の島々 ギリシャ・ローマ神話。世界の西の果てにあつて、英雄や善人が死後永遠に幸福に暮らせる島。『夢想の秘密』でケナストンも夢に見た(第三十四章)。

二二二八 \*アイアイエ ギリシャ神話。魔女キルケの住んでいた島。

二二二八 \*カイル・イス ブルターニュ地方の伝説。沈んでしまった、世界で最も美しい都。

二二二八 \*インヴァリス プリニウスによると、(幸運の島々)の一つ。『夢想の秘密』でフェリックス・ケナストンも寓意風の謎の夢に見た(第三十四章)。

二二二八 \*ヘスベリデス 大地の神ガイアがゼウスとの結婚の祝いとしてヘラに贈った金の林檎が植えられている園。

二二二八 \*メロピス ギリシャ人が西方の楽園の島に名付けた名前の一つ。オギユギア、アトランティス、ヘスベリデスの園などと同様であるとベアリング・グールドは *Curious Myths* (1868) に記している。

二二二八 \*ブラネシア プリニウスは、ブラネシアを(幸運の島々)の一つで、滑らかな表面からそう名付けられたとしている。『夢想の秘密』でケナストンも夢に見た(第三十四章)。

二二二八 \*ウツタラー インドの神話。ウツタラー・クルスの治める楽園では、木々に果物だけでなく、ミルクや食べ物、服もまた実る。そこで人々は一年の一万倍の年月を生きた。

二二二八 \*アヴァロン ケルト伝説。致命傷を負ったアーサー王が運ばれ、その遺体が眠るといふ島。

二二二八 \*ティル・ナンベオ アイランンド神話で、(命の国)という意味。半神トウアハ・デ・ダナンが永遠の命をもつて生きる国の一つ。

二二八 \*テレーム フランソワ・ラブレール『ガルガンチュウ物語』に出てくる修道院。この世の修道院とは何もかも正反対でテレームの僧院の唯一の規則は「欲することをなせ」だった。

二二九 \*レウケー ギリシャ神話。アキレウスとパトロクロスの亡霊は、偉大な英雄たちを祀るレウケー（白い島の謂）に移り住んだという。そして、そこでヘレネーと結婚したともいわれている。

二三〇 \*カルプルニウス・バツルス プリニウスの著作にその名前が出てくる歴史家。

二三一 \*コルマクの娘のアレ アイルランド伝説に登場するアイルランドの女王コルマク・マク・アルトの娘に Ailbe という名前がある。

二三四 \*シユードポリス Pseudo (にせの) + Polis (「古代ギリシャの」都市国家) の意味。

二三四 \*ハマドリユアス ギリシャ神話の木々のニンフ。長命ではあったが不死ではない。特定の木の中に住み、その木が枯れると同時に死ぬと信じられるようになった。

二三四 \*アキレウス 『イリアス』に出てくるギリシャの英雄たちの中心的存在。テッサリアのプティアの王ペレウスと、ネレウスの娘である海の女神テティスとの一人息子。トロイアの英雄ヘクトルを倒しトロイアを陥落させたが、後にアポロンに導かれたパリスの矢を受けて死ぬ。

二三四 \*白鳥の娘ヘレネ ゼウスとレダの娘。また別にネメシスとの娘という話もある。ゼウスに追われたネメシスはさまざまに姿を変えて逃れるが、鷲鳥になったところを白鳥になったゼウスに捕まり交わった。ネメシスはスパルタの森で密かに卵を産んだが、それを羊飼いが見つけてレダに渡した。卵からヘレネが生まれるとレダは自分の娘として育てた。白鳥に姿を変えたゼウスが交わったのはレダだという話もある。

二三五 \*ハデス 死者の神であり、地下の王国、すなわちティタン神族や怪物や人間の亡霊たちが閉じ込められている冥界の支配者である。ハデスの妻であり、冥界の女王であるのはペルセポネである。後に、冥界のこともハデスと呼ぶようになった。

二三六 \*テルシテス 『イリアス』中、ただ一人素性の卑しい人物として描かれている醜く口汚い復讐心の強い男。後のギリシャ文学では、アマゾン族の女王ペンテシレイアの死体に恋をしたとってアキレウスを嘲笑っ

たためアキレウスに打ち殺されたことになっている。

二三七 \*クローリス ギリシャ神話。ローマにおける花と豊饒の女神フロラと同一視されている女神の名前。野原で遊んでいたクローリスは西風ゼビュロスに見初められ、攫さらわれて結婚した。

二三七 \*ユーボニア マン島の古名。

二三八 \*ユグドラジル 北欧神話。樗とわりの大樹で、全世界を垂直の軸として支え、その三本の根は神々の宮居（アスガルド）、人間界（ミッドガルド）、暗黒と死者の国（ウトガルド）を連結するといわれる。全宇宙の運命はこの木にかかっているとされる。

二三八 \*ウルダルの泉 北欧神話。ユグドラジルの第一の根の下にある命の泉。

二三八 \*ノルン 北欧神話。運命の三女神、Urd（過去の女神）、Verdandi（現在の女神）、Skuld（未来の女神）のことをいう。

二三九 \*アイオリス地方 小アジア北西部にあった古代ギリシャの植民地。詩人がアイオリス地方の言い回しを使うときはエロティックな題材のことが多かった。

二四〇 \*プシケ 美しかったプシケを、アプロディーテ（ウエヌス）は嫉妬心から最も醜い者に恋をするよう仕向けようと息子のクピドーに命じたが、クピドーはプシケに恋してしまった。プシケを深い谷へ連れていったクピドーは、決して自らの姿をプシケに見せず、夜になると人間の姿になってプシケのもとを訪れた。

二四四 \*ユガティヌス ローマ神話。結婚を司る神。

二四五 \*ラレス ラル神の複数形。ティベリス川の河神の娘ララの子。ローマ人の家政の神。

二四五 \*ペナテス ローマ人の家庭の食料入れ戸棚・貯蔵室の神。

二四七 \*ヴィルゴ 若い娘の服をヴィルゴに捧げる習慣があった。ラテン語の乙女座を意味する *virgo* から。

二四七 \*ムティヌス ローマの結婚の神、男根崇拜の神。 *nutans* はラテン語で「男根の」という形容詞。

二四七 \*ドミドウクス 婚礼に際し新婦を新郎の家に連れていく精霊。ラテン語で家を意味する *domus* から。

- 二四七 \*スビゴ ローマの婚礼の神。新婦を寝台へと連れていく役割を担う。ラテン語で *subigo* は「強いる、服従させる」を意味する。
- 二四七 \*プレーマ ローマの婚礼の女神で、新婦の腕を開かせ、耳元で甘い言葉を囁く。この婚礼の儀式的流れは概ね、アンドルー・トゥックの *Pantheon* (1787) に記載されているとおりである。
- 二四八 \*ルンキナ ローマの草取りの女神。ラテン語の *runcina* すなわち「鉋」から。
- 二四八 \*セイア 蒔かれた種の世話をするローマの女神。
- 二四八 \*ノドサ ローマの農作物の茎の節・瘤を整える神。ラテン語 *nodosus* すなわち「結び目・瘤・節が多い」から。
- 二四八 \*ヴォルーシア 穀草の葉の折れ具合を管理するローマの女神。ラテン語で *volucra* は幼虫が葡萄の葉を巻く「葉巻蛾」という意味となる。
- 二四八 \*オツカトル 馬鋤で耕すときに祈るローマの神。ラテン語 *ocator* は「馬鋤でならす人」という意味になる。
- 二四八 \*サトール ローマの種蒔きの女神。ラテン語で *sator* は「種を蒔く人」という意味。
- 二四八 \*サリトール 熊手でかくローマの神。ラテン語 *sario* は「鋤を入れる／除草する」という意味。
- 二四八 \*ステルクティウス 古代ローマのサトゥルヌスと同じ農耕の神。ラテン語で *stercus* は肥やしの意味。
- 二四八 \*ヒツポナ ギリシャ神話のネレイスと同じく馬や厩舎を統べるローマの神。
- 二四八 \*ブボナ ローマ神話の牛を護る女神。ルンキナからブボナまでのローマの農耕に関する神々についても、概ね、アンドルー・トゥックの *Pantheon* (1787) に記載されているとおりである。
- 二四九 \*アリストタイオス アポロンとキレネとの息子で、農牧の神の名前。
- 二四九 \*フォルナクス 古代ローマのパン焼きの女神。
- 二五〇 \*テルミヌス 古代ローマの境界・境界標の神。
- 二五〇 \*微笑む若い男 ハルボクラテスのこと。ギリシャ・ローマ神話。指を唇にあてた子供として表されるエジ

プトの太陽神 Horus のギリシャ名。昇ったばかりの太陽の象徴で、ギリシャ・ローマでは沈黙の神とみなされた。

二五一 \*サテュロス ギリシャ神話で、ディオニソスの酒宴においてマイナスに同伴する山野の精。姉妹はオレイアスたち。好色でいたずら好き。

二五二 \*オレイアス ギリシャ神話の山の精。特定の自然現象の中に宿るニンフの一種。

二五三 \*シレノス 単数形はシレニ。ディオニソスの酒宴においてはマイナスたちの年寄り仲間で、パン神またはヘルメスとニンフの子。猪鼻で馬の尾と耳を持ち禿頭で太鼓腹をしていた。プリュギアのミダス王に捕えられたとき、王に伝えた人生の叢義が、人間にとって最善は決してこの世に生まれないこと、そして次善はできるだけ早く死ぬことであった。

二五四 \*ペリシテ人 ペリシテは古代パレスチナの国の名前だが、ここにその国があるわけではなく、むしろアメリカ合衆国を仄めかしている。ジュリアス・ロレンス・ロスマンは *A Glossarial Index to the "Biography of the Life of Manet"* (1954) で指摘している。『土の人形』にも登場する。現代の英語でも *Philistine* という語は、「俗物、凡俗の人、実利主義者、教養がなく知的な興味、美的感覚に欠ける」という意味で使われていて、本書のペリシテ人もそれが誇張されて描かれている。

二五五 \*プロトゴノス オルフエウス教(オルフェウスを祖とあがめる古代ギリシャの密教的救済信仰)においてエロスがとる一形態。宇宙の始祖。

\*マザー・セリダ このマザー・セリダは、名前は明示されていないが明らかにキュベレである。キュベレは元来プリュギア(フリギア、小アジアの中部から北西部にわたっていた古代国家)の穀物の実りと多産を象徴する大地の女神だったが、ギリシャ神話に組み入れられた。もとは大地から生まれ、両性具有だったが神々が男性器を切除し女神となったという。切除された部分から生じたアーモンドより生まれたアッティスをキュベレは愛し、結婚しようとしたアッティスと花嫁の父を嫉妬心から狂気に陥れ、彼は自ら去勢し死んだ。キュベレの神官団コリュバンテスは宦官であるとされる。また異説では、アッティ

スはある王から同性愛の関係を求められ、それに応じるのを嫌がったために去勢されたという。キュベレは彼を神として祀り、去勢された男子のみが彼の神官となるように定めた。異説は他にもいくつかあるが、何れもアッティスは去勢の後に死んでいる。女神は櫓を象った冠を戴き、ライオンが曳く戦車に乗った姿で描かれることが多い。アッティスの死に絶望して太鼓を打ち鳴らし、その死を嘆きながら国中を走り回ったという逸話、幼い頃、山中に捨てられたキュベレはライオンと豹から乳を与えられて育ち、やがて競技と踊りを始めると従者であるコリュバンテスたちにシンバルや太鼓を与えて祭儀の伴奏をさせたという話もある。

二五九 \*ホルヴェンディル 《マニユエル伝》の至るところに顔を出し、ロマンスの登場人物であることを意識した解説などをしていく。『土の人形』や『イヴのことを少し』にももちろん登場する。『夢想の秘密』でそういう側面が目立たないのは、ホルヴェンディル自身がフェリック・ケナストンの分身として主人公を演ずるからであろう。

二五九 \*アルキユオネ 英語でハルシオン Halcyon。ギリシャ神話。難破して死んだ夫のケユクスと共に翡翠に変えられた。この二羽が巣を作る冬至の前後は海が凪になると伝えられる。

二六一 \*ラクル・カイ 《マニユエル伝》でときおり言及される都。Sraws and Prayer-books (1924) によると十三世紀の歴史があるという。

二六一 \*テオドレ王 《マニユエル伝》に属する *Donnet* (1950) や『土の人形』にも出てくる王で、ペリオン・ド・ラ・フォレは將軍として仕えた。ドム・マニユエルは、テオドレ王が東方人の攻撃を受けたときに彼を助けた。

二六二 \*ラ・ベアル・エッタール ホルヴェンディルのラ・ベアル・エッタールへの愛は『夢想の秘密』の中心となる話題である。

二七〇 \*ポベトル ギリシャ神話。夢の擬人神オネイロイの一人。獣の形をとり、悪夢を生む。ポベトルは怖れさせる者という意味。

- 二七〇 \*サラミス ギリシャ沿岸の島。
- 二七〇 \*アイアス サラミスの王テラモンの息子。『イリアス』ではアキレウスに次いで二番目に偉大な武将。
- 二七一 \*ピロクテテス 弓の名手で、トロイア戦争ではピロクテテスが放った矢でパリスが死に、トロイア攻略の端緒となった。
- 二七一 \*オデュッセウス ギリシャ神話。『イリアス』の主要人物の一人で、『オデュッセイア』の主人公。トロイア戦争ではギリシャ軍の最も明敏な指導者だった。ラテン名はユリシーズ。
- 二七一 \*アガメムノン ギリシャ神話。ミュケナイの王。『イリアス』では、ギリシャの諸公が忠誠を誓うトロイア戦争における総大将として描かれている。
- 二七七 \*エイジアス *Ugias* のアナグラムになっている。
- 二七七 \*ヴェルティノ *Novely* のアナグラムになっている。ペリシテ人の信仰する三神の残りはセスフラ<sup>Sesphra</sup>で *Phrases* のアナグラムである。これらは、アメリカ民俗物主義の三要素を暗示しているともいわれる。
- 二七八 \*リブナ 旧約聖書に出てくるリブニカ。ゲルシヨンの子孫であるレビ人であるリブニは、ダビデ王に天幕聖所に奉仕するように命じられた。「出エジプト記」第六章十七節他。
- 二七八 \*ゴリアテ ゴリアトとも。ダビデに殺されたペリシテ人の巨人戦士。羊飼いの少年ダビデの石投げ器で倒される。「サムエル記 上」第十七章四十三節他。
- 二七八 \*ゲルシヨン ゲルシヨムとも。レビの三人の息子の長子。ペリシテ人とは特に関係ない。「出エジプト記」第六章十六節他。
- 二七八 \*ペレイデス アキレウスのこと。
- 二八四 \*プラクサゴラス 古代ギリシャの医師。紀元前三四〇年頃、コス島で生まれる。著作は現存していない。
- 二八六 \*ヒボクラテスが紀元前三七五年に設立した教養学校で教えていたらしい。
- 二八六 \*ゼウス ギリシャ神話の最高神。
- 二八六 \*ポセイドン ギリシャ神話。海神で地震を起こす力を持つ。

二八七 \* 八福の教え「山頂の説教」と呼ばれているイエスの教えの冒頭の部分を指す。「マタイによる福音書」第

五章三節から。

二八七 \* ムーサ、ギリシャ神話。ゼウスとムネモシユネのあいだに生まれた、学問・芸術を司る九人の女神の一人。

二八七 \* 仕立屋が一人前といえる人数 英語には「Nine tailors make a man.」という諺がある。

二八七 \* セスフラ ペリシテ人の崇める三神の一人。Sesphra は Phrases のアナグラムになっている。この神の誕生

については『土の人形』第十四章を参照。

二九〇 \* フンコロガシ いささか唐突に登場するこのフンコロガシは初期の版には存在せず、一九二一年のイギリス

版から挿入された。これは一九二〇年の『ジャーゲン』発禁裁判を当てこすって書かれたものである。

一九二〇年には独立した冊子 *The Judging of Jorgen* というタイトルでシカゴの *The Bookkells* 社から刊行されたものもある。裁判で本書が猥褻図書として告発されたときの根拠となった法律が一般的にコムストック法と呼ばれていて、この名は同法の設立にかかわったアンソニー・コムストックに由来する。このフンコロガシが聖アントニウス (St. Anthony) の名を挙げているのはそのためである。

二九〇 \* 聖アントニウス 修道士生活の始祖といわれるキリスト教の聖人。二五〇年頃、エジプトで生まれたといわれている。さまざまな誘惑を象徴する怪物に囲まれ苦闘する聖アントニウスの姿は美術作品の題材として好まれた。

二九一 \* エドガー エドガー・アラン・ポーを暗に指す。

二九一 \* ウォルト ウォルト(ウォルター)・ホイットマンを暗に指す。

二九一 \* マーク マーク・トウェインを暗に指す。

二九四 \* *Historia de Bello Venetis* 他 ここから次々に挙げられる書名の中にはいくつか実在が推定されるものがあるが、すべてが実在したかどうかは不明である。タイトルは、*Historia de Bello Venetis* が「よき性愛の歴史」*Liber de immortalitate Mentulae* が「不滅の男根の書」というような意味で、最後の *quem sine horrore nemo potest legere* は「誰も恐怖なしには読めないもの」というような意味であろう。リチャー



ド・バートンが『千夜一夜物語』（大場正史訳・河出書房）の巻末論文で、*Cinadica* はソタデスの「男色」という意味の作品として、また、*Epidævus* は「肉体的攻撃」という意味の書名として紹介している。*De modo coeundi* は、サベルスの「体位論」としてあげられている。*Erotopægnion* はラエヴィウスの「恋愛歌」として登場する。

二九五 \*ザンキウス ザンキウス以下の五人は何れも、ロバート・バートンの *The Anatomy of Melancholy* (1896) に登場する名前である。

二九七 \*レテ 黄泉の国を流れる忘却の川。その水を飲んだ者は一切の過去を忘れることになる。

三〇三 \*ディティカヌス 『ファウスト博士』に出てくる悪魔。「一尺ほどの大きさで、うずらのような姿をしているが、色は緑のまだらだった」と記されている。（『ドイツ民衆本の世界Ⅲ ファウスト博士』松浦純訳・国書刊行会）

三〇四 \*アマイモン 伝説の王で、大悪魔の一人。中世の悪魔学では宇宙を支配する四悪魔の一人で、東方を受け持つとされている。

三〇五 \*バラサム 『フォースタス博士』に出てくる十の地獄の地域の一つに *Barthum* というのがある。

三〇五 \*ベルゼブブ 悪霊の首領。「マタイによる福音書」第十二章二十四節に「悪霊の頭ベルゼブルの力によらなければ、この者は悪霊を追い出せはしない」などと出てくる。『ファウスト博士』に出てくるベルゼブブは「肌色の毛をして、頭は恐ろしい耳をした牛。やはり毛むくじゃらで、大きな翼が二つあるが、野原のアザミのようにトゲだらけ。半分みどり、半分きいろで、翼の上には炎が噴き上がる。しっぽは牛である」とある。

三〇五 \*ベリアル 悪魔。「コリントの信徒への手紙 二（コリント人への第二の手紙）第六章十五節に「キリストとベリアルとにどんな調和がありますか」などと出てくる。『ファウスト博士』に出てくるベリアルは、「毛むくじゃらで炭のように真っ黒な熊の姿」「耳は上に高く立ち、その耳も鼻も燃えるように赤い。長い歯は雪のように白く、しっぽは三尺ほどもある。肩には翼が三つついていた」と描写されている。

三〇六 \*アシエロト アシユタロテ／アシタロテ／アシエラとも。『ファウスト博士』に出てくる悪魔。「地べたを

這う獣の姿。しっぽの上に立ち上がるようにしてやってきた。足はない。しっぽはアシナシトカゲのような色で、腹はひどく太く、上のほうには小さな足が二つ。これはまっ黄色。腹は少し白く黄色っぽい。背中のほうは栗色で、ハリネズミのように、指くらしいの長さの尖ったハリや剛毛が生えている」と記されている。元来カナン<sup>1</sup>の豊饒の女神。聖書では異教の偶像神として敵視される。

三〇六 \*フレゲトン フレゲトンとも。ギリシャ神話の冥界の火の川の名前だが、『ファウスト博士』では悪魔の王の一人になっていて、地獄の十の領域の一つ「幽窟<sup>7</sup>」を司っている。

三〇六 \*カナゴスタ 『フォースタス博士』で、「全身白と黄色で毛むくじゃら、頭はロバだがしっぽは猫で、鉤のような爪は一尺も伸びている」と書かれている悪魔。カナゴスタの代わりにここにサタンが入っている版もある。

三〇六 \*コラズマ 『フォースタス博士』にカズマという地獄の領域が出てくる。ここからキャベルは名前をとったのではないかと指摘されている。

三〇一 \*ブレシャウ スーマリアとその都ブレシャウは《マニユエル伝》に属する *Callantry* (1907) に出てくる。

三〇二 \*セト エジプト神話。オシリスの兄弟で、その殺害者である悪神。頭が驢馬<sup>8</sup>、身体が人間で、手にはアンサタ十字を持つ姿で表される。

三〇二 \*バスト ブラストイスという古代エジプトの都市の地方神で、猫頭の女神。

三〇七 \*ポルトツァ ポルトツァでのコスの冒険は *The Silver Stallion* の第四部のできごとと関係がある。そこでポルトツァはトルテカ族の都だった。

三二六 \*カルキ ヒンドゥー教。ヴィシュヌ神の、十番目で最後の化身（アヴァタラ）。未来の世に現れて悪を滅ぼしダルマを回復させるという。そのとき白い馬、あるいは白い馬に乗った姿で現れるといわれている。キャベルの他の作品において、アンタンの救世主が乗る馬の名前として登場する（『土の人形』、『イヴのことを少し』）。キャベルは、馬の紋章が押されている《マニユエル伝》全集版を「カルキ版」と呼んでいる。

たらしい。

三二七 \*フロリメル スペンサー『妖精の女王』第三巻・第四巻に、貞淑・女性らしきの典型として登場する美女の名前。

三二七 \*猫が柩の上に 東欧地方に古くからあった吸血鬼の伝説などでは「死者が葬られる前に、その死体を猫がまたぐと、死者は吸血鬼になる」という信仰が強かったという。「そして吸血鬼がその状態を保つためには、つまり朽ち果ててしまわないためには、常に生きている人間の血を補給しつづけてはならない」とされていた。(那谷敏郎『魔』の世界』講談社学術文庫)

三三二 \*身を焦がすよりも結婚する方がましという諺 「コリントの信徒への手紙 一(コリント人への第一の手紙)」第七章九節の「情欲に)身を焦がすよりは、結婚した方がましだからです」(新共同訳)という言葉に由来する。

三三二 \*結婚はせっかちに、再婚はゆっくりと 原文は *Marry in haste, and repeat at leisure*。ウィリアム・コングリーブの *The Old Bachelor* (1963) 由来の *Marry in haste, and repent at leisure* 「急いで結婚 ゆっくり後悔」という言葉がある。

三三四 \*ロードス島のエビゲネス ギリシャの喜劇詩人。 *The Bacchic Women* を著した。

三三六 \*アスモデウス タルムード文献に見られる悪霊・悪魔の王。

三三六 \*地獄の宗教は「…」民主主義である 本章で描写されている以降の地獄の政府は、第一次大戦下のトーマス・ウッドロウ・ウィルソン大統領とアメリカ合衆国政府を仄めかしている。

三四六 \*サー・ガヌロン 十一世紀の武勲詩「ロランの歌」の登場人物。シャルルマーニュの十二勇士の一人だが、ロランを裏切り死に至らしめたため、「裏切り者」「叛逆者」の代名詞となる。最後は四肢を引き裂かれて処刑された。

三五〇 \*メリディ 『ファウスト博士』で、ベリアルが治める地域とされている。

三五〇 \*タルタロス ギリシャ神話の神の名であり、冥府の底なし淵のことでもある。『ファウスト博士』では、

地獄の十の領域の一つとして挙げられている。

三五〇 \*底なしの淵 「ヨハネの黙示録」第九章に「この星には、底なしの淵に通じる穴を開く鍵が与えられた」(聖書協会共同訳) などと出てくる。

三五〇 \*ブラッコス 『ファウスト博士』に出てくる悪魔 Drachus (ドラフス) の綴り間違いか。『ファウスト博士』では「四つ足は短く黄色と緑、背のほうは茶色、腹は炎のような青、しっぽは赤っぽい」と記されている。

三五一 \*お告げの祝日 天使ガブリエルが処女マリアにキリストの受胎を告げた日。三月二十五日。

三五一 \*何年も前に金持ちがしたように 「ルカによる福音書」第十六章第十九〜三十一節。金持ちとラザロの話。地獄へ堕ちた金持ちが天国のラザロとアブラハムに向かって救済を訴えた。

三五五 \*ヤコブの梯子 「創世記」第二十八章十〜二十二節でヤコブは夢の中で天にまで届く梯子を見て、その梯子を神の使いたちが昇り降りしていたところから、神が共にいて保護していることを確信した。ヤコブは「ここはまさに神の家ではないか。ここは神の門だ」といって、頭の下に置いて枕にしていた石を取り、その場所をベテルと名付けた。

三五七 \*エノクとエリヤ エノクは「創世記」第五章二十四節で「エノクは神と共に歩み、神が取られたのでいなくなつた」とこの章で一人だけ「死んだ」と書かれておらず、死ぬことなく天国へ行ったと説める。エリヤは「列王記 下」第二章十一節で「火の戦車と火の馬が二人の間を隔て、エリヤはつむじ風の中を天に上って行った」(聖書協会共同訳) と記されている。この二人を死なずに神によって天に召された者として挙げている。

三七一 \*ザカリエル 教皇グレゴリウス一世時代のカトリック教会における七大天使の一人。

三七二 \*ペトロ イエスが特に選んだ十二人の弟子たちの一人。ペトロはその中でも常に指導的な役割を果たしていた。ペトロとその兄弟アンデレも漁師だった。イエスに「私に付いて来なさい。人間をとる漁師にしよう」といわれ弟子になる。また、「イエス・キリスト、神の子救い主」をギリシャ語で書いたときの頭

文字をとると *ichthys* となって魚という意味になり、イエスやその弟子たちを示すシンボルとして魚が用いられた。

三七三 \*それはすでにやったことがある ペトロがローマから逃げたとき、イエスに会い「主よどこに行かれるのですか」と問うと、「もう一度十字架にかけられるためにローマへ」と答えた。ペトロはそれをきいてローマに戻り、十字架にかけられることになった(「ペトロ行伝」)。

三七三 \*最初で最高の教皇 カトリック教会ではペトロを最初の教皇としている。天国の鍵をイエスから受け取ったとされているからである。「私はあなたに天の国の鍵を授ける」(「マタイによる福音書」第十六章十九節)。

三七三 \*鶏のように鳴いて 「マタイによる福音書」第二十六章等で「今夜、鶏が鳴く前に、あなたは三度、私を知らないというだろう」とイエスにいわれ、そのときは強く否定するものの、三度知らないといってしまう。

三七五 \*カナの地で イエスの最初の奇蹟である「カナの婚礼」のこと。婚礼で葡萄酒がなくなってしまったとき、水甕みづがせに満たした水が葡萄酒になった。「ヨハネによる福音書」第二章。

三七五 \*エルサレムの二階の小さな部屋 イエスが超越の食事をする場所を探す弟子たちに、都で水甕を運ぶ男に頼めば席の整った二階の広間を見せられると指示した部屋のこと。いわゆる、最後の晚餐の場所である。「ルカによる福音書」第二十二章七節以降他。

三七八 \*カッパドキア 小アジア東部の古代の国。十七年にローマ領となった。「ペトロの手紙 一」の宛先の一つ。

三八三 \*レス・デア *Res Dea* は *Serena* のアナグラムになっている。

三九六 \*バビロン 古代バビロニアの首都。

三九六 \*アルドナリ アルダナーリーシユヴァラとも。ヒンドゥー教。シヴァとパールヴァティーが合体した両性具有の神。

三九六 \*プタハ 本書ではPhtと綴られているが、Phtのことか。古代エジプトの神で、宇宙の創造者。

三九六 \*ヤルダバオート グノーシス主義の一派では、七人の天使あるいは創造神の最高者である。ユダヤ教のヤハウエと同一視される。

三九六 \*アブラクサス ギリシャ文字で書かれた古代の魔除けの言葉。二世紀以後はグノーシス派によって神からの発散靈気として神格化された。フローベル『聖アントワヌの誘惑』では「無限に発露する力を備えた至上なる存在は、アブラクサスと呼ばれ」と記されている。

四〇一 \*人が独りでいるのはよくない「創世記」第二章十八節「また、神である主は言われた。「人が独りでは良くない。彼にふさわしい助け手を造ろう。」(聖書協会共同訳)。

四〇三 \*グラストンベリー アーサー王伝説において、アーサー王が死に、グイネヴィアが尼僧になったあと、ランスロットが修道僧になった地。

四〇六 \*カーリオン アーサー王の宮廷があったという言い伝えのある地。

四〇六 \*ジョウユーズ・ガルド 喜びの城の意。アーサー王伝説でランスロットの城館があったという地。

四〇六 \*モルガン モルガン・ル・フェ。モルガーンとも。アーサー王の異父妹で、王に悪意をいただき、王妃グイネヴィアと騎士ランスロットとの恋を密告する。

四〇六 \*イーニッド アーサー王の円卓の騎士の一人ジェレイントの妻。貞女の鑑かがみ。

四〇六 \*ヴィヴィアン 女魔法使いでマーリンの愛人。〈湖の貴婦人〉とも呼ばれる。

四〇六 \*ニミュエ ニミュエもまた〈湖の貴婦人〉である。

四〇六 \*エタード ガーウエインはペレアスが恋い焦がれるエタードのところへ行行って、エタードが嫌っているペレアスを殺してきたと欺いて同衾する。嘘がペレアスにばれるが、ペレアスは湖の乙女しか愛さなくなつた。

四〇八 \*タイース 紀元前四世紀後期のアテナイの娼婦。アレクサンドロス大王の愛妾であり、その死後はプトレマイオス一世の愛人になった。

- 四〇八 \* サッフオー サッポーとも。レスボス島に生まれた紀元前六〇〇年頃のギリシャの女流詩人。女性に対する恋愛歌などがある。
- 四〇八 \* ロドベ ギリシャ神話。女神アルテミスに処女の誓いを立てたが、アプロディーテはこれに気に入らず彼女を狩人と交わらせ、アルテミスによって泉に変えられた。
- 四〇八 \* ランプサクス 小アジアにあった古代ギリシャの植民市。ギリシャ神話のプリアポス、すなわち生殖の神で、男根をもって表された神の像があったことで知られる。
- 四〇八 \* コレオス・コレロス ジェラルド・マズグレイヴが最初に訪れた国の支配者（『イヴのことを少し』参照）。
- 四〇八 \* アドニス ギリシャ神話。女神アプロディーテの愛を受けた美青年。
- 四一〇 \* パボス キプロス西部の古代都市。アプロディーテ神殿があり、アプロディーテ崇拜の中心地だった。
- 四一〇 \* アマトス 紀元前三〇〇年頃までキプロスにあった古代都市。
- 四一四 \* レダの胸に身を預けた、あの情熱的な鳥 本書四六二頁白鳥の娘ヘレネの項参照。
- 四三六 \* 夢想の秘密 原文では the cream of just で「冗談の神髄」というような意味だが、『マニユエル伝』の一冊で『夢想の秘密』という邦題で刊行されている作品のタイトルなので、ここでもそれに合わせた。